

## 典礼—神と人との対話

市瀬英昭（南山短期大学講師）

すべての宗教共同体は祈りを持つ。祈りという行為なしに、宗教はあり得ない。共同体内の祈りは一定の形式を備えてゆく傾向があるが、本来、それは自発的なことばであり、自由なはずである。教会のあり方を考えるとき同種の問題が浮かび上がる。教会は一方で歴史や法律や教義を形成し所有しつつ、他方で常に「出来事」であり「対話」であろうとする。旧約聖書の示す歴史がすでに神とイスラエル民族との対話の歴史であった。イスラエルの神への不信と反抗、そして立ち戻りの繰り返しという壮大な神と人類との対話の歴史であった。これに続くキリスト教会も本質的に対話の構造を持っている。時折り、生気を喪失した形式主義に陥ることがあっても、やはり教会には対話のダイナミズムが与えられているようである。

教会の自己実現の場である典礼祭儀も本来、出来事であり、神と人との、またこれに基礎づけられた人と人との対話である。典礼は長期にわたり儀式と同一視され、その起源、意義、発展と適応という側面が研究されてきた。典礼学といえば専ら典礼法規に関わる専門科目と理解されていた。しかし祈りを経験する者は典礼がそのような固定した静的なものではなく、勝れて動的なものであり、我々を時に励まし、慰さめ、時に我々に挑戦して新しい生き方へ促すものであることを知っている。以下、キリスト教典礼を神と人との対話という観点から素描したい。

独白とは異なり、対話は通常、相手を必要とする。そして真の対話であれば、それは対話する両者を共に成熟させることができる。なぜなら、対話の相手によって古い自己が壊され新しい展望と生き方が両者に開かれるからである。もっともこの場合、両者に事柄自体に触れ、それに導かれようとする率直さと謙虚さが必要なのだが。事柄自体に触れるということは宗教用語では「回心」と言

い換え得るし（八木誠一）、また本来生の回復と言う意味では「癒し」とも呼び得るであろう。要するに、古い自己が新しくされる、あるいは古い自己が死んで新しい自己が誕生する、という出来事がここで起こる。それは予め計算され、計画されたものではない。期せずして生起する。だから両者に予測できない意外性や驚きがある。自分に投げかけられたことばが自分を造り変えるということは一つの衝撃である。発言されたことばだけとは限らない。沈黙かそのような衝撃を与え得る。いずれにしても、ここで重要なことは、真の対話のためには両者が可変であること、変わる用意のあることである。そうでなければ対話とはなり得ず、一方が他方に追従するか、果てしない不毛な対立が残るのみであろう。

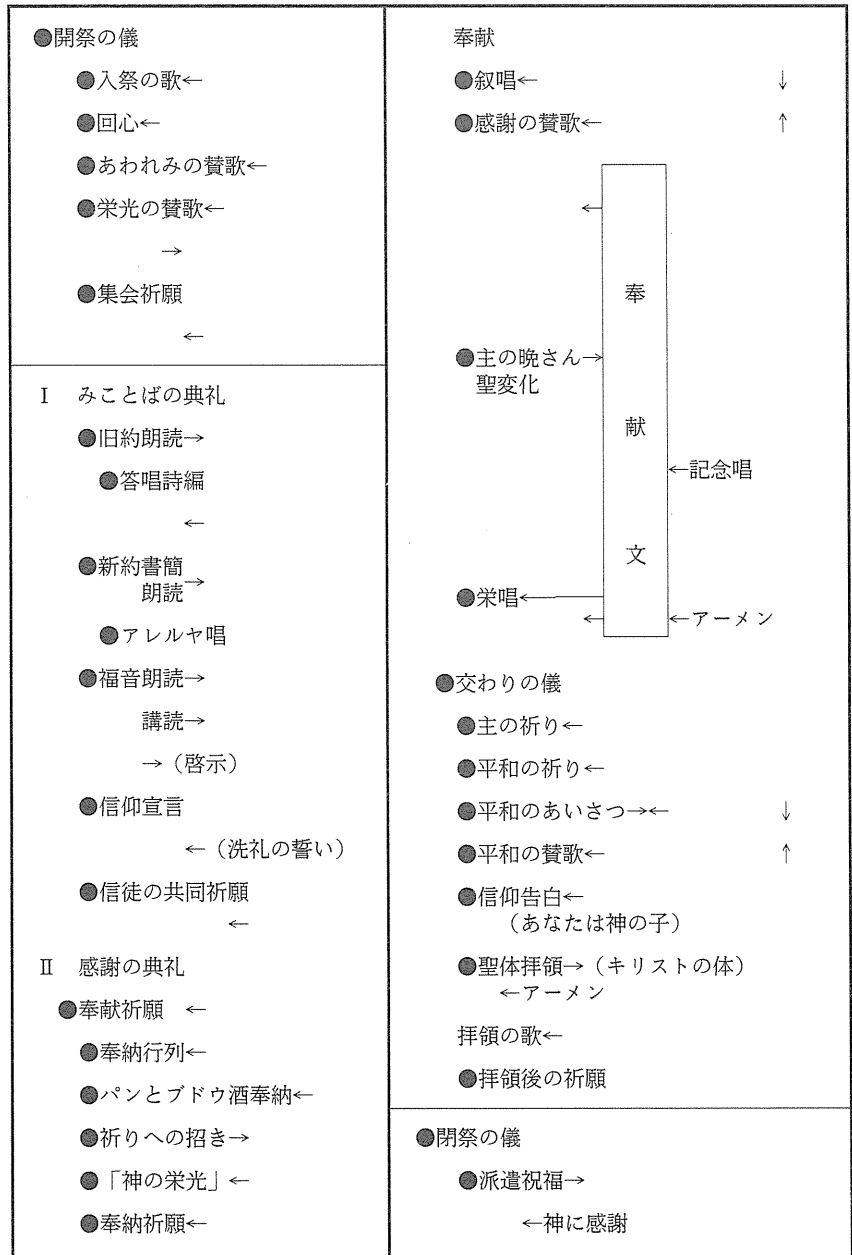
さて、以上のような文脈で、典礼が神と人との対話である、と言われるとき一つの素朴な疑問が生じる。果たして神は可変か。神は「不動の動者」ではないか。「不変の神」ではないのか。

通念に反して、聖書の記述する神は不変ではない。人間を対話の相手として創造し、人間と交わりを求める神、人間の不忠実に心を痛み、立ち戻りを呼びかけ、苦難を共にする神、どこまでも人間を探し求める神がそこには描かれている。この神は悔いるということさえあり、変わり得る神であって決して不変の神ではない、とJ. モルトマンも強調する。この神のあり方がナザレのイエスの生と死に見られる。イエスと出会い、その言葉と振舞に接し、とりわけその十字架死とその新生を眼のあたりにした弟子たちは、神がどのような方か、どのような方でないかを驚きながら学んでいた。神が人間の上に君臨し、支配し、命令を下す神ではないということを、神がその開心を待って人間の前に「立ちつくす神」（E. シュバイツァー）であることを経験していった。神における新しい側面の発見、それが可変であることの意味である。不変であるのは、神が人間と共にあろうとする意志、自己を与えようとする忠実さである。その顕あれ方は種々異なり得る。ちょうど子供を育てる母親が、あるときは叱り、あるときは慰め励ますが、成長を願う母としての想いは不変であるとの比喩で言えようか。K. バルトの神理解の関連で、E. ユンゲルはこう書く。「神は他のものになることなしに別様であり得る」。要するに、我々の理解を限りなく越えてゆく常に新しい神の側面が経験され自らが造り変えられるということが生起するとき、そこに対話があると言い得るのである。

「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉である」と典礼憲章は述べているが、これは厳密な意味での定義ではない。むしろ定義は注意深く避けられている。拡がりを残すためである。事柄自体は常に定義を乗り越えてゆく。だから典礼が対話であると言われるときもそれは定義ではなく、重要なポイントを示しているだけである。

典礼祭儀の中核たる聖餐式（ミサ）は形式上も内容的にも下記の通り明瞭な対話の構造を持っている。

ミサ聖祭の構造（沢田昭夫、『ミサを生きる』女子パウロ会、1984年より）



注 →←神と人との応答

人と人との応答（先唱者ないし歌隊と会祭と、または会衆同志の二グループ間）

司祭と会衆、会衆相互の対話が神と人との対話を表わしている。尤も典礼は、荘重な形式と象徴を持つ祭儀という側面と、自発的で開かれた遊びに近い祝祭という側面を持っている。要はこのバランスが大切なのだが、キリスト教の典礼は本来的には、キリストの復活と我々の生を祝う祝祭であることを忘れてはならないだろう。この点が対話の源泉なのであるから。内容的にも対話本来の機能と結果が表われる。ことばの面では、生に関する勝手な思い込みや、安易な理由づけが聖書からのメッセージにより破られ、新しい現実理解へ導かれ得るし、しるしの面でも、正に生き方にかかわる転換が生こり得る。キリストの生き方、自らを与え尽くした生き方の結晶としてのパンとブドウ酒が拝食されるとき一つの出来事が起こり得る。R. N. ベラーはその経験をこう表現した。

「(パンを拝食した) その瞬間、私が礼拝の中にもち込み、ほとんど礼拝の間じゅう頑なに守り続けていた自己意識が粉々に砕け散ってしまっていた。」

これは深い意味における対話の結果と同じではないか。典礼は生きた汝としての神と出会う場である。言葉とシンボルを通して。岡村民子氏は『対話の場としての正典』において、対話が「今ここにおける出来事性」を失ってはならないこと、にもかかわらず我々はしばしば、「今ここに」新しく語りかける神を仰ぐ代わりに、すでに分かり切ってしまった神、それ故に私の概念となり対象化されてしまった偶像に身をゆだねている、と警告する。このような点からおそらく、祭儀が支配-被支配の関係を生み出す、という山形孝夫氏の批判もなされるのだろう。が、本来はそうあってはならない。

神に語りかけられ、自らを与えられる人間が、その神と対話しつつ、今度は自分自らが神と人ともに語り出し、自らを人に与えてゆく生き方に導かれる。人間がその本来性と主体性を回復し、その意味で復活する場、それがキリスト教における典礼の本来の意義である。この典礼という神と人との対話の場で、我々は身をもって知ることができるだろう。

人は人と神とへ向かって自らを差し出す存在なのだということを。

#### 主な参考文献

- J. モルトマン 1974『十字架と革命』新教出版社
- E. ユンゲル 1984『神の存在——バルト神学の研究』ヨルダン社
- R. N. ベラー 1984『宗教と社会科学のあいだ』(3版)未来社
- 金子晴勇 1985『対話の構造』玉川大学出版部
- L. ボフ 1987『教会、カリスマと権力』エンデルレ書店